ドキュメント挑戦

ディスプレー技びと ▷3

発想の創造的破壊者…③

服に付けて情報と一体

いつでもどこでも、ほしい情報が手に入る「ユビキタス・ネットワーク社会」。「ユビキタス」はラテン語で「同時に、至るところに存在する」という意味で、あらゆる情報機器がネットワークでつながる二十一世紀の姿をこの言葉に込めている。

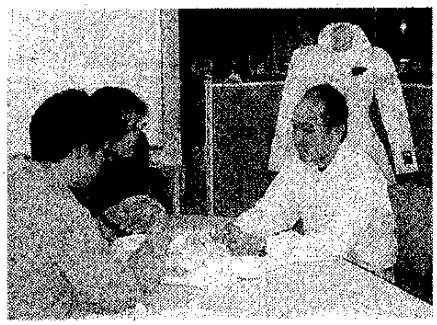
□■□

家庭では映画をはじめ各種のコンテンツ（情報の内容）が楽しめる。会社でも街を歩いている時でも、知りたい情報を入手できる。ブロードバンド（高速大容量）通信の普及によって、社会の隅々までユビキタス・ネットワークが張り巡らされる。情報のやり取りの窓口であるディスプレーの活躍の場も広がっていく。

「人間がディスプレーを身につけてしまえば、家でも会社でも町中でも自在に情報が引き出せる。これほど便利なことはない」。パイオニアデザイン（東京・目黒）事業開発部マネージャーで工業デザイナーの原沢直希（36）はこう考え、ディスプレーを付けた衣服のデザインを思い立った。

昨年夏に文化服装学院、慶応義塾大学政策メディア研究科やファッションデザイナーを巻き込んだ協業組織を作った。携帯電話インターネット接続サービスの普及のように、情報に常時接していないと現代人は不安になる。

「情報社会に適したファッションを提案したい」「服のディスプレーには企業が広告を流せる」「身にまとう人が歩く広告塔になってくれる」など協業チームの議論は盛り上がった。パイオニア総合研究所が開発したフィルム状ディスプレーを背中や胸元、腕に付け春秋用の服、夏服、冬服とデザインは進んだ。



情報化時代の新しい製品デザインに考えをめぐらせる原沢氏㊨

原沢は日本大学芸術学部を卒業、パイオニアに入社してミニコンポ、カーオーディオ機器などの製品デザインに携わり、一九九四年にデザイン部門が分社化されてからは製品パッケージのデザインなどを受け持ってきた。

衣服とディスプレーの融合に目を付けたのは「工業デザインの新分野を開きたい」との思いからだ。今年三月の社内展示会に新しい服のデザインを発表。家電分野は成熟しているといわれるが、新事業の開拓余地は大きいことを社内に示した。

フィルム状ディスプレーは開発が完了したわけではなく、フルカラー化の作業が残っている。「歩留まりを良くし量産技術を確立するのも大きな課題」と、デバイス開発グループ第二開発室長の土田正美は言う。

□■□

海外ではプラスチック基板の上にトランジスタを作る新技術も発表されており、ガラス基板を使わない超薄型・超軽量のペーパー型ディスプレーは開発競争が激しくなってきた。開発した技術の改良に取り組む一方、世界の開発動向にも目を向けながら、土田は「夢のディスプレー」を追い続ける。

原沢にもゲームのできるディスプレー付きリストバンドなど、新しい着想がわき出てくる。「『百聞は一見にしかず』という言葉があるように、情報の出入り口であるディスプレーは生活と切り離せない」。技術とニーズを先取りする力を両輪に、情報社会は深化していく。

（編集委員　水野裕司）

＝敬称略